２０２３年８月２５日　金沢文庫キリスト教会　夏期修養会

「黙 想 の 手 引 き」

　信仰者にとって、祈りは大切です。祈りは主なる神との対話です。一方的に、神に訴えることではありません。もし、一方的に、神に訴えてばかりいると、自分の独り言になったり、単なる呟(つぶや)きになってしまう危険性があります。そうならないためには、祈る前に、聖書の言葉をじっくり聴くことが有益です。

本日は、一つのテーマに沿って、聖書の言葉をじっくり聴いて黙想してまいりましょう。黙想では、ゆっくり聖書を読み、聖書の言葉をじっくり聴きます。一度読めば分かったつもりになりますが、２回、３回、４回と何回か読んでいくのです。動物が食べ物を良く消化するために、反芻(はんすう)するように、何度も読んでみるのです。そのうちに、それまで気にかけなかった聖書の言葉の一部が、心にひっかかるようになることもあります。そうなったら、そこが狙い目す。そこで、立ち止まって、聖書は何を言っているのか、思いを巡らしてみましょう。聖書の前後の言葉も参照し、時には自分の体験も織り混ぜながら、思いを巡らして行くと、さらっと読んだ時には気付かなかった発見があります。もしかしたら、なぜこう言っているのかという問いが湧いてくることもあるでしょう。その問いの答えを求めて、さらに思いを巡らすのも有益だと思います。

　このように、黙想はそれぞれの方が自由に神の言葉を聴き、神と交わることのできる時間です。今回の修養会では、一つのテーマが与えられていますので、それに沿って、黙想してまいりましょう。

　まず、礼拝説教の聖書箇所、その前後も含めた箇所のみ言葉を聴いてみましょう。

マタイによる福音書 第６章１９～２１節です。

　19 「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。20 富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

「天に富を積もう」という言葉を、本日のテーマにした理由は、救われるために、天に富を積むとを真剣に考えなければならないと、私が思わされたことがあったからです。そう思うようにさせられた主イエスの言葉が頭から離れなかったからです。ルカによる福音書 第１２章１３節以下の言葉です。新共同訳聖書では、「『愚かな金持ち』のたとえ」との小見出しのついた記事です。こう言われています。

　13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」15 そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19 こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

　　　そう主イエスはおっしゃっています。私は、このお金持ちは自分の仕事に忠実で勤勉な人だと思います。ですから、それ相当の報酬を手にするのも当然です。マタイによる福音書 第２５章の「タラントンの譬」の中でのご主人の言葉、「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。」との言葉をかけてもらってもよいほど、仕事に忠実な人だと思います。たぶんこのような人は、世の中でも尊敬されることでしょう。ですから、このような人が「愚かな者よ」と言われるのは、かわいそうだと思ってしまいます。しかし、神の前にあっては、「それで良いのか」と厳しく問わるのです。「神は『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」と主イエスはおっしゃるのです。確かに、私どもの地上の命は、明日どうなるか分かりません。いや、この次の瞬間にどうなるかも分からないのです。若いから、まだ何十年も生きられるとは限らないのです。ですから、自分のために富を積むことばかりに心を向けて、神の前に豊かにならないでいたら、取り返しのつかないことになる可能性があるのです。救いを求めることは、先延ばしには出来ないのです。

　今、引用しました箇所の最後の２１節で、「自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」と言われています。これは、先に読みました「あなたがたは地上に富を積んではならない。」「富は、天に積みなさい。」と直接つながる言葉だと思います。いずれの箇所でも、どこに「富を積む」か、誰のために「富を積む」かが問題になっているからです。

　そこで、まずは、「天に富を積む」のとは逆のことと思われる言葉を見ておきたいと思います。天に富を積んで、神の前に豊かになるのと正反対は、地上に富を積むことです。その地上に富を積むとは、地上で経済的に豊かになることだけではないと思います。偽善も地上に富を積もうとする生き方の一つだと思います。地上において、他の人から評価されることをひたすら求めるからです。偽善は、神の前にあっては、万事明らかで、見え見えです。どんな巧みな偽善であっても、神を欺(あざむ)くことは出来ません。偽善は人を欺くだけです。しかも、しばしば、偽善はバレてしまいます。そうなると、偽善者は恥ずかしいばかりです。この偽善者の生き方は、天に富を積もうとする者、神の前に豊かになろうとする人にとって、反面教師と言えるのではないでしょうか。

その反面教師の事が言われているのが、マタイによる福音書 第６章５～８節です。

　5 「祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは、人に見てもらおうと、会堂や大通りの角に立って祈りたがる。はっきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。6 だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる。7 また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思い込んでいる。8 彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。

　先ほど見ましたマタイによる福音書 第６章１９～２１節で、主イエスは「富は、天に積みなさい」とおっしゃっていますが、「天に富を積む」とは、どうすることなのか具体的には言われていません。そこで考えるに、「天に富を積む」、その一つは、主イエスの言葉、聖書の言葉に聴き従うことだと思います。そう考えて、「天に富を積む」とは、具体的にどうすることかを考えてみましょう。

　　　天に富を積む生き方をとは、どのような生き方であるかを教えてくれていると思われる言葉をいくつか見てみましょう。まず、詩編 第１篇です。

　　　1 いかに幸いなことか／神に逆らう者の計らいに従って歩まず／罪ある者の道にとどまらず／傲慢な者と共に座らず／ 2 主の教えを愛し／その教えを昼も夜も口ずさむ人。／ 3 その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び／葉もしおれることがない。その人のすることはすべて、繁栄をもたらす。／ 4 神に逆らう者はそうではない。彼は風に吹き飛ばされるもみ殻。／ 5 神に逆らう者は裁きに堪えず／罪ある者は神に従う人の集いに堪えない。／ 6 神に従う人の道を主は知っていてくださる。神に逆らう者の道は滅びに至る。

　神のみ前で正しく歩むこと、それが天に富を積む一つの生き方ではないでしょうか。

　そして、「天に富を積む」ことは、神の言葉に従うことだと考えていくと、本日の説教でも引用しました箇所が示されましたルカによる福音書 第１０章２５～３７節では、こう言われています。

　25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27 彼は答えた。「『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。30 イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

　ここで言われている『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』との言葉に従うことは、天に富を積むことの一つでしょう。そうすることで、「永遠の命を受け継ぐことができる」のですから、これこそが、「天に富を積む」ことだとも言えるでしょう。

　そう読んでいくと、後半の「善いサマリア人の譬」は、「天に富を積む」ためには、具体的にどのようにすれば良いかを教えてくれています。「善いサマリア人」のしたことは、決して大きなことではありません。言うなれば、小さな親切です。ただし、仕事のために移動していた時に足を止めること、また、見ず知らずの人に親切にすること、宿代を払ってあげることなどは、面倒なことです。何の得もないでしょう。でも、これは譬ですが、「善いサマリア人」はしっかり天に富を積んだでしょう。

この「善いサマリア人」の譬えから、私が思い浮かぶのは、以下の聖書箇所です。これは主イエスがご自分の再臨した時のこと、栄光の座、裁きの座に着かれる時のことを預言された聖書箇所です。マタイによる福音書 第２５章３１節以下です。

　31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、33 羊を右に、山羊を左に置く。34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』 37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』40 そこで、王は答える。『はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』(後略)

　そう言われています。これは、すべて主イエスの言葉です。天に富を積むことの一つは、ここで言われている「主イエスの兄弟であるこの最も小さい者の一人に小さな愛の業を行うこと」ではないでしょうか。大きな愛の業を行えればそれに越したことはないでしょうが、小さな愛の業を行うことも、天に富を積むことになるのではないかと、ここから私は思います。

　　　最後に、ルカによる福音書 第２３章３９～４３節を読んでみましょう。

　39 十字架にかけられていた犯罪人の一人が、イエスをののしった。「お前はメシアではないか。自分自身と我々を救ってみろ。」40 すると、もう一人の方がたしなめた。「お前は神をも恐れないのか、同じ刑罰を受けているのに。41 我々は、自分のやったことの報いを受けているのだから、当然だ。しかし、この方は何も悪いことをしていない。」42 そして、「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」と言った。43 するとイエスは、「はっきり言っておくが、あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」と言われた。

　「イエスよ、あなたの御国においでになるときには、わたしを思い出してください」十字架の上で、譬えようもない苦しみの中で、このように主イエスに向かって言えたということは、驚くべきことです。呻(うめ)き、苦しむだけで終わってもおかしくありません。余りの苦しみに、誰かを呪ったとしても、不思議はないでしょう。しかし、彼はそれとは正反対の思いになって、たぶん最後の一言で、主イエスに必死におすがりしたのです。この彼の姿勢は、彼にとってこの時が初めてであったかもしれません。しかし、これこそ、最後の最後に、一心になって、天に富を積もうとする真に貴い姿勢ではないでしょうか。